

ハイデルベルク信仰問答講解説教47「父なる神」(2012年8月26日 礼拝説教)

【聖書箇所】

わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。わたしは遠くからの神ではないのか。誰かが隠れ場に身を隠したなら／わたしは彼を見つけれないと言うのかと／主は言われる。天をも地をも、わたしは満たしているのではないかと／主は言われる。(エレミヤ23:23-24)

そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたの中に、魚を欲しがると子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。また、卵を欲しがると、さそりを与える父親がいるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(ルカ11:9-13)

【説教】

今日の間答から主の祈りの本文に入ります。ご存知のように、主の祈りはまず神さまへの呼びかけから始まります。「天にましますわれらの父よ」信仰問答もまずそこに注目いたします。早速、問120から見ていきましょう。

この「われらの父よ」という呼びかけの部分に「祈りの土台」があると信仰問答は述べています。ここはわたしたちがまず心に留めておきたいところです。それは祈りの土台であると共に、すべての信仰の土台と言い換えてもよいでしょう。それは神さまとわたしたちの関係のことだからです。祈りそのものが神さまとの関係があって成り立つものでありますが、具体的にそれは「父よ」と呼びかける関係であること。同時にそのことは、わたしたちが神の子であることを示しています。わたしたちは神の子として神さまに祈るのです。それはもともと信仰の基本となる部分です。しかしそこが案外、わたしたちがすっぱりと抜け落ちてしまっているところではないでしょうか。以前、説教で祈る時にただ神さまと祈ること、父なる神さまと祈ることでは、天と地ほどの開きがあるという話をしました。祈りは、もちろん神さまに向かって祈るのですが、そこで神さまとわたしたちはどういつながりにあるのか。そこが一番重要なのです。呼びかけの部分はその神さまとの関係を示します。この祈りの土台をしっかりしなければなりません。

この「父よ」という表現に疑問を抱く人々もおります。人間を越えた普遍的な神さまに特定の性別を当てはめるのはよろしくないという主張です。ですから意識して「父よ」と呼びかけない人もおります。ただ「神さま」と呼びかけたり、「主なる神さま」と言ったり、場合によっては「父であり母である神さま」と呼びかけるそうです。またこの「父」という表現に古代イスラエルの家父長制度の響きを感じる人々もいるでしょう。絶対的父権制度です。専制君主のような存在です。そういうことを意識してわざわざ「父」という表現を省くといえます。また逆に現代社会においては、父親の威厳が失墜している。また虐待などの社会問題もあつてますます良い父親ということがイメージしにくくなった。そういう世の中の事柄が「父よ」と祈ることを妨げてしまう。しかしそれでよいのでしょうか。わたくしはそういう理由で「父よ」と呼びかけないことは、この祈りの恵みを無駄にすることではないかと思うのです。もったいないと思うのです。

間違っほしくないのは、ここでの「父」は、人間の性別における男性を強調しているのでも、この世の父親像を当てはめていることでもない。あくまでも主イエスが神さまに「父よ」と呼びかけた。そこに囚っているのです。わたしたちが神さまを父と呼ぶ根拠は、この世の父親にあるものではありません。イエス・キリストが神の子として、唯一、神さまに父よと呼びかけることができた。「アッパ父よ」それは子どもが父親に向けて言う言葉「パパ」「お父ちゃん」という言葉です。この主イエス

の呼びかけに対して神さまは「これはわたしの愛する子」と答えます。そういう関係がそこにある。それが「独り子」というあの使徒信条の表現になります。キリストこそが神さまを父と呼び、また神さまから愛する子と呼ばれるただ独りの存在ということなのです。

この神さまとキリストとの関係がわたしたちの祈りの中心になります。なぜ「父よ」と呼びかけるのか。それはその関係にわたしたちもあずからせていただきたい、恐れ多くも「父よ」と呼ばせていただくのです。ここを間違えないでほしい。祈りは、人間の単独の行為ではありません。キリストによるのです。だから祈りの最後に「キリストを通して」「キリストによって」と祈ります。「父よ」という呼びかけは他でもないキリスト御自身の呼びかけなのです。それにあわせている。ですからそのように言えることは恵み以外の何ものでもありません。これを拒否することは、その恵みを無駄にすることです。

先週の説教を思い起こしていただきたい。わたくしは主の祈りにあわせるということを示しました。主の祈りにすべてがある。だからここに合わせる。こちらを合わせる。むこうがこちらに合わせるのを待つのではない。主イエスは「祈るときには、こう言いなさい」とおっしゃって、そして主の祈りの言葉をわたしたちの口に授けてくださった。だから主イエスが教えてくださったとおりに、こちらをその祈りに合わせる。委ねるのです。

それはもう少し踏み込んで言えば、キリストと一つになって祈るということです。祈るとき、わたしたちはキリストと共に、あるいはキリストの中で祈ると言った方がよいでしょうか。それはもはや人間の業ではない。ですから祈りは秘義であり奇跡です。そのことを信仰問答は「神がキリストを通してわたしたちの父となられ」と述べています。本来、わたしたちは神さまを「父よ」と呼べる者ではなかったのです。神の子ではなかった。罪を犯して神さまの御前から失われておりました。そのわたしたちを御前に回復させ、神の子としてくださったのは、キリストの十字架と復活の御業に他なりません。わたしたちは洗礼を受けてキリストに結ばれ、このキリストの御業にあずかって神の子とされるのです。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」(ガラテヤ3:26)

「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、アッパ父よと呼ぶのです」(ローマ8:14-15)

聖霊の助けによって、わたしたちは信仰へと導かれました。それゆえにこの特権にあずかるのです。「父よ」と呼ぶのは恵みであり特権です。この恵みを人間的な次元、枠に押し込めてしまい、自らそう呼ぶことを妨げてしまうことがあってはいけません。これは神さまが与えてくださる恵みなのです。

そしてこの恵みは何よりもわたしたちの内に、「神に対する子どものような畏れと信頼とを」起こすのであります。「畏れ」というのは、怖がることではありません。神さまを神さまとする。弁えることです。ある翻訳では「尊敬」と訳しています。神さまを尊敬すること。それは分かってきているようで案外分かっていないところなんです。罪の人間は神さまを捨てていました。尊敬するどころか、神さまよりも自分を上にしていました。自分の考えを中心にしていたのです。むしろ信仰のこと、神さまのことを馬鹿にしているところがあるのです。そんな信仰が何の助けになるのか。信仰では人間は救えない。そういう見くびりがあります。信仰を与えられて教会生活をしていても、気がつくともうそういう思いにかられることがあるのです。それはやはり最後のところで神さまに委ねられない。信頼しきれないという人間の罪の現れではないでしょうか。

しかしこの「父よ」という呼びかけが、わたしたちの忘れていた「畏れと信頼」を再び思い起こさせるのです。神さまを父とすることは、そういうわたしたちの不信仰を乗り越えさせるのです。それは「子どものような」無条件な信仰を呼び起こします。子どもへの親に対する信頼は無条件です。教えられてするのも、論理的に考えてするのもない。何も考えずに信頼するのです。わたしたちの神さまに対する畏れ、信頼は本来そういうものです。疑うことをしない。それは良い物を与えてくださるといふ信頼です。親は子を心配し、子に良いものを残そうとするのです。

最近、続けて病床の方々を訪ねておりました。その人たちは人の親でもあります。共通していることは家族への思いです。家族のことを話される時は感極まってくる。ある方は一人娘さんのことを心配しておられました。娘に何もしてあげられない。そのことを悔やんでいる。人の親でもそのように自分の子を思い心配する。それはこの問答の根拠となった聖書の御言葉にも記されておりました。ルカ11：11-13を読みましょう。

「聖霊を与えてくださる」とあります。聖霊はわたしたちを神の父とする神さま御自身の働きです。神さまに「アツパ」と呼びかけることができるようにする。そのために聖霊はわたしたちをキリストへと導きます。ここにわたしたちにとって最も良い物があり、最も必要なことがあります。それこそがわたしたちの神さまへの信頼の根拠となるのです。どんな試練に直面して厳しい状況にあっても、すでに神さまは御子によってわたしたちに最大のものを与えてくださっている。これ以上のものはありません。そこを見失わないかぎり、わたしたちは神さまに絶対の信頼をもって従うことができます。

最後に問121に注目しましょう。「天にまします」の意味が語られています。ここでわたしたちが思いをいたすのは、神さまは天におられるということです。「天」は神さまのご支配のこと。それは地上のすべての権威を越えて、常識や価値観を越えて高いご支配を持たれることです。先ほど「父よ」の呼びかけのところでも、この呼びかけを人間的な次元や枠に押し込めてはいけないということを申しましたが、それがはっきり示されるのはこの「天にまします」という部分になります。わたくしはこの部分は非常に重要だと思います。つまりこの部分が、わたしたちを人間の次元から神さまの次元と申しますか、信仰の次元に引き上げるからです。そこがなければわたしたちの信仰はまったく意味を持たなくなります。人間の能力の及ぶところから、神さまの全能へとわたしたちの思いを高めていく。あるいは広げると言ったらよいでしょうか。そこで祈りは祈りとなる。それが本当の祈りの世界なのです。

ただこの世のこと、願いごだけの祈りならば、それはまだ祈りの世界に入っていないということです。神さまはそれを越えて全能なのです。エレミヤ書を読みました。「天をも地をも、わたしは満たしているではないか」ただ地上のことだけではありません。すべてをご存知であり、すべてを支配しておられるのです。全知全能。範囲が広いのです。23節を読みましょう。偶然、この御言葉はローズンゲンでは9月の御言葉になります

のでカレンダーに記してあります。「遠くから」というのは、すべてを見渡せることがおできになるということです。「ただ近く」だけを見ているのではない。遠くからすべてを見渡しておられる。それが神さまです。人間は近くのものしか見えていません。近くのものしか見えていないから、ただそのことだけしか祈れない。祈りが近視眼的なのです。

遠くからの神、神さまは遠くからすべてを見渡しておられるのです。鳥瞰図というのがあります。鳥が見下ろすように高いところから広範囲に見下ろすこと、そのように描いた地図があります。よくパースペクティブと言います。見通しとか展望、全体的な視野ということです。神さまはそういう見通しを持っておられるのです。ただ今のこと、目先のことで振り回されない。そのことがもたらす全体を遠くから、高いところから見ておられる。わたしたちが「天にましますわれらの父よ」と祈るとき、その祈りはこの地上の事象を越えて、その先を見通しておられる神さまに向かうのです。神さまはその全能の御性質をもって、わたしたちの「体と魂に必要なすべて」を良き父として与えてくださるでしょう。もうすでにわたしたちにはイエス・キリストが与えられているのですから、わたしたちはどこまでも信頼して神さまに祈り続けることができるのです。祈りをささげます。